

# 今と七百年前のアンコール 真臘風土記を読みながら (三)

## (三) 住居

周達観の「真臘風土記」の(三)は住居(宮室)である。

現在のカンボジアの人口は約一四〇〇万人。首都、プノンペン<sup>①</sup>の人口は約一〇〇万人。アンコール王朝時代の首都のシェムリアップの人口は約一〇万人とされている。もともとシェムリアップは、今では年間一〇〇万人ぐらいの観光客で賑わうようになっている。



王宮 プノンペン



プノンペン メコン河畔の夕方の賑わい

僕が初めてカンボジアを訪れたのは、国連カンボジア暫定統治機構 (UNTAC : United Nations Transitional Authority in Cambodia) による統治 (一九九二～一九九三年) が終わった

後のことだった。しかし、アンコール遺跡群を見学するには、まだ自動小銃やバズーカ砲などを持った軍人を警護のために雇わなければならなかった。当時の状況を思い出すと、何もかも夢のようである。

以来、年に一度ぐらいいはカンボジアに行っている。通算すると、二十回ぐらいい行っていると思う。その中でもっとも緊張したのは一九九七年七月、プノンペンでフンシンペック党とカンボジア人民党が衝突した時だった



た。その時、カンボジア政府の要人との打ち合わせのため、僕とTさん二人はプノンペンに滞在していた。同じホテルに宿泊中の日本のマスコミ関係者が流れ弾で死亡した。しかし、そんなことが分かったのも後のことである。



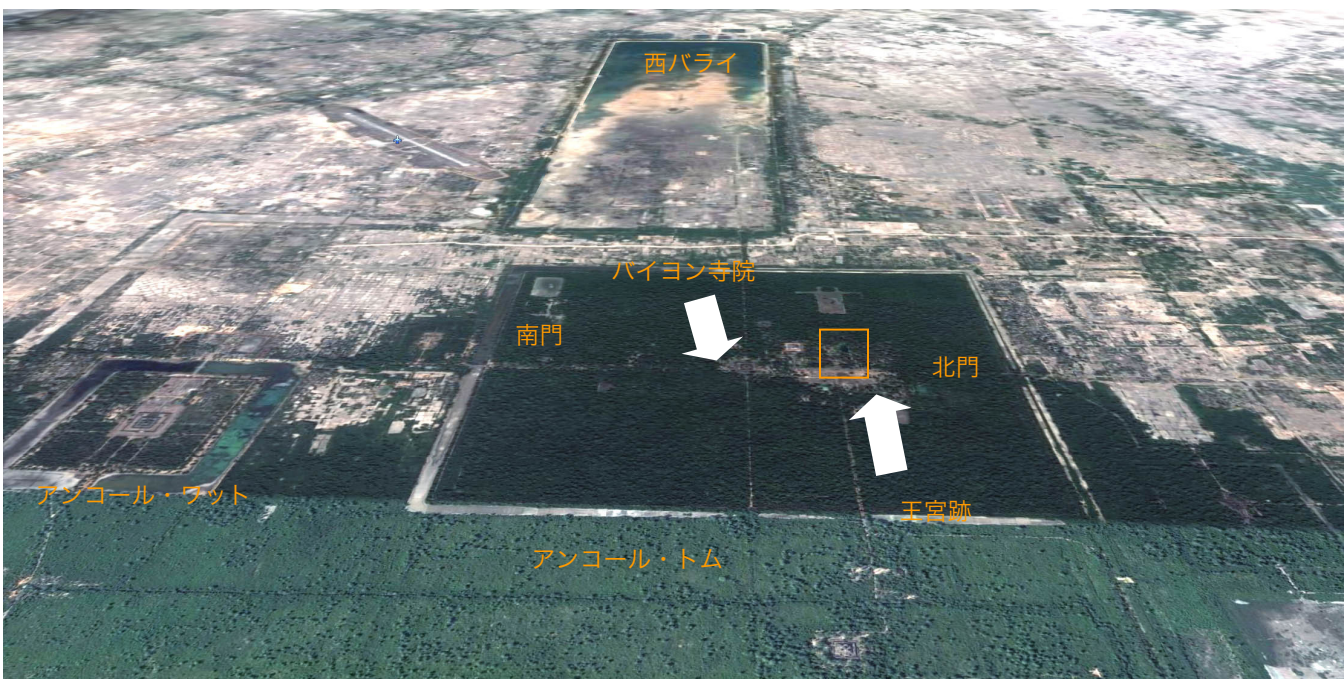
その時は、動けなかった。すべての約束は破棄され、「噂」だけが支配する世界に突然に放り込まれ、身の危険も覚えた。衝突が起こった前日にプノンペンに着いた。入国した瞬間、ほとんど本能的に空気の異変を察知し、空港から市内に入る途中で、急遽、無理を言い、他の予定をキャンセルしてもらい、知り合いのカンボジア人ガイドを雇用したのが正解だった。彼が身近に居たもので、どれだけ心強かったか計り知れない。



右上の写真は、一九九六年頃の首都、プノンペン中心街の大通りである。まだ乗用車は少なかった。しかし、現在は、中国やベトナムほどではないにしても、大きく変わり、車と人で溢れている。明るく、けばけばしく賑やかになっている。上の写真は、二〇〇六年八月撮影のプノンペンから車で二時間ぐらい離れた郊外の小さな街である。そこでも乗用車が通りに溢れていた。十年前のプノンペン中心街よりも人々の活気が伝わってきた。

余談だけれど、デジカメを使うようになってからは、撮影年月日データが画像データと一緒に保存され、自動的に時系列で写真が整理されるようになってきている。これは便利だと、古い写真やネガもデジタル化して統一的に整理することにしたところ、古い写真やネガの日付はデジタル化を行った年月日になってしまった。考えてみれば、

当然のことである。二〇〇四年の写真の中に三十年前の写真が紛れ込む、二〇〇一年の写真の中に四十年前の写真が紛れ込むなどグチャグチャになってしまった。そのため現在一万枚以上の写真の日付データの確認・修正作業を行わなければならない羽目に陥っている。しかし、カンボジアに関する写真は枚数も限られるので、頑張つて整理を続けている。



七百年前のカンボジアはいくら頑張つても想像の域を出ないけれど、ともかく周達観はアンコール王朝の首都、シエムリアップにあった王宮や住民の住居などについて次のように書いている。

王宮および役所の建物はすべて東側が正面になっている。王宮はパイヨン寺院の北側にあつて北門に近く、その周囲は二・五〜三キロである。王宮の正殿（表御殿）の瓦は鉛製で、それ以外は黄色の土瓦である。梁や柱はきわめて大きく、それらにはすべて仏像が彫られている。屋根は壮観で、長い回廊は二階建てで、出っばたり交差したりして複雑である。

この建物の配置や大きさなどに



関する記述はきわめて正確である。太陽崇拜民族だったのではないかということ、カンボジアでは今でも東が神聖視されている。バイヨン寺院など現存する寺院は東側が正面になっている。例外はアンコール・ワットで、そのためアンコール・ワットには何か特別な意味があるのではと考えられている。

この記述の関係を示すのが、手前を東側、奥を西側にして眺めた、前ページの衛星写真である。アンコール・トムの中心部にバイヨン寺院があり、その北側に王宮があった。木造だったため建物は現存してはいないけれど、その跡を計測すると周囲は約二・五キロだという。

王宮跡を中心に拡大したのが前ページの衛星写真である。その下の写真は「象のテラス」と、三島由紀夫の戯曲ですっかり日本人には有名になった「癩王のテラス」を手前で奥に「象のテラス」という配置で東側から撮ったものである。写っている人との関係で、その規模を推定できるだろう。周達観は、木造だったため現存しない王宮の説明に留まらず、噂話なども紹介している。

国王が政事を司る場所の窓格子は金製である。左右には四角柱があり、その上には鏡がある。さらに窓の脇にも四、五十枚の鏡が並べられており、この窓の下が「象のテラス」になっている。

宮中には凄い場所がたくさんあると聞くけれど、見張りがきわめて厳しく見ることはできない。当地の人によると、毎夜、国王は宮殿の金塔、ピメアカナス寺院に入り、そこで寝る。ピメアカナス寺院には土地の主である九頭の蛇の精霊が住んでおり、毎夜、女性の姿になって現れる。その女性の姿になって現れる精霊と国王は毎夜、共寝し性交する。その間、妻も寺院には入れない。国王は二回の時報の後でなければ、寺院を出ることはできない。寺院を出て妻や妾と寝ることもできない。女性の姿の精霊が現れなくなることは、国王の死期が迫っていることの前兆で、国王が一晩でもピアカメナス寺院に行かないと、必ずカンボジアは災いを被ることになるといふ。



建物などに関する記述は、そうなのかと思うしかないけれど、蛇の精霊、土地の主に関する記述からは、かつて読んだ南方熊楠（一八六七〜一九四一年）に関する本に、同氏が民俗学的見地から「主」について論じていたことを思い出した。

（一八九一年、二十四歳 訪米中の写真：「ウィキペディア」）

「主」とは「山・森・池・大木などに古くから住みついている霊力を持つ動物」のことである。「精霊」とは「原始宗教の崇拜の対象となる、山川・草木など種類の物に宿ると考えられる魂」のことで、死者の霊魂を指す仏教用語の「精霊」とは違う。

民俗学的な範疇のテーマである。博覧強記の南方熊楠は、「主」、とくに建物の「主」は「工事の完成を祈り、神々の心を和らげるために、犠牲として水底や地中に生き埋めされた人」——「人柱」ひとしらべに関係があるなどと書いていたと思う。

そうした記述に、若い頃、僕は興味を惹かれたことを覚えている。もともと、その本の書名や所在を直ちに特定することができない。①引越しの度に、そして何かあるとスペースがないもので本を処分してきたこと、②手元には、それでもまだかなりの本が溜まっているけれど、相変わらず整理が悪いこと——この二つが主因だと思いたいけれど、それ以上に僕の記憶力が急激に衰えたことに原因がある。

ちなみにフリー百科事典「ウィキペディア」(Wikipedia)には、南方熊楠について「博物学者、菌類学者、民俗学者。菌類学者としては動物の特徴と植物の特徴を併せ持つ粘菌の研究で知られている。——歩くエンサイクロペディア(百科事典)と呼ばれ、彼の言動や性格が奇抜で人並み外れたものであるため、後世に数々の逸話を残している。」「子供の頃から、驚異的な記憶力を持つ神童だった。また常軌を逸した読書家でもあり、——彼のその学風は、一つの分野に関連性のあるすべての学問を知ろうとする膨大なものであり、土蔵や那智山中なちさんちゅうに籠こもっていそしんだ研究からは、曼荼羅まんだらのような知識の網が産まれた。当時としては早い段階での、世界規模での比較人類文化学を得意とした。現代科学の方法論の見地からは、考察は粗雑であり、学問的に純化されていないとする批判もあるが、独特の宇宙観、破天荒な生き方を評価する向きもある。彼にまつわるエピソードは膨大である。」などとあった。

もともとカンボジアの蛇の精霊、土地の主の話は、南方熊楠が関心を示していた「人柱」とは違う流れからきているらしい。蛇王の娘の女蛇は人間と一緒にになり、その娘の女蛇のために蛇王が水を飲み干し、カンボジアの大地を創ったという建国神話に由来しているという。そしてインドネシアにも同じように蛇が出てくる建国神話があるという。ヒンズー教にも先に触れた通り、「乳海攪拌」にゅうかいかくはんの場面で蛇は出てきて、重要な役目を果たしている。

蛇に注目して東南アジア諸国の建国神話を調べると、いろいろ面白い発見がありそうなのがする。

なお、周達観は（三）住居を、次のように書いて終わっている。

王族・大臣の家も庶民の家と比べると大きく異なり、広くて立派な建物である。そして建物のうち、祖先の霊を祭る祖廟そびょうと家長の居る正房・正寝の二ヶ所は瓦ぶきの屋根とすることも許されている。建物の大きさ・広さは官職によって定められている。庶民の家は、貧富の程度によって家の大きさは異なるけれど、すべて草ぶき屋根で、瓦を使うことは許されていない。



上の写真は二〇〇三年、シエムリアップ郊外で椰子砂糖やしを売っている家族の子供たちを写したものである。奥に高床式の草ぶき屋根の小屋が見える。アンコール王朝時代の庶民の家も多分、こうしたものだったのだろう。

（つづく）

（二〇〇七年晩夏 伴 友貴）